

2001(平成13)年1月30日発行 編集・発行 図書館学教育部会

21世紀図書館学教育への展望を拓く

図書館学教育部会長 高山 正也(慶應義塾大学)

新しい年、新しい世紀を迎えるにあたり、新年、新世紀を部会の皆様と共に祝い、併せて新世紀の図書館学教育の一層の発展を皆様と共に力強く押し進めて参りたいと思います。

顧みれば20世紀は図書館学の教育にとって、やっと芽が出て、その芽を育てた時期であったと言えましょう。図書館人の養成教育や研修の必要性が認識されると同時に、図書館学という学術研究分野の紹介も始まり、やがて、正規の教育制度の中に定着を見るに至りました。特に20世紀の後半にいたって、図書館学教育は司書という資格付与のための教育として大学での教育が定着し、後期博士課程までの一貫した研究・教育体制も整い、図書館学の教育研究に携わる人達の養成の道も開けました。しかしこのことは図書館学教育のレベルアップがなされたと言うよりは、講習から大学院までの各種の教育の体系があるという教育の多様化が進んだと言った方が正しいでしょう。図書館という言葉は社会に定着し、広まりましたが、そこには抜き難く無料貸本屋のイメージが定着しており、日本の社会における図書館員や、図書館学教育に対する認識の度合いは未だ充分とは言えません。

このような状況の中で新世紀を迎えるにあたり、そこで図書館学教育を展望するとなれば、この実態を見据えながら、実行可能で、なおかつ将来展望のある方策を考えなければなりません。これは、言うは易く、実行の難しい仕事です。正直に言って、私の手に余る課題ではあります。ただ、現実に教育の体系が既に多様化しているなら、その多様化している教育を前提に、それぞれ、教育を受ける学生も、教育の場を提供している設置機関(大学)も、そして教育を行う我々図書館学教育部会員にとっても、有意義であり、実行可能であり、満足できる魅力ある方策を考えなければなりません。そこでは何よりも、図書館学教育の現状を見つめることからスタートすることが大事で、いたずらな理想や幻想を追い求めるることは得策ではありません。

現在日本の図書館学教育は一部の大学院までの研究教育体制を整えて、相当数のスタッフと比較的充実した研究教育環境を有する大学も、圧倒的に多くの大学のケースである1・2名の専任者、場合によっては専任者無しでの司書課程教育も、さらにはたった2ヶ月間で多様な受講者に集中的に教育を行う講習においても、同じ「司書」の資格を与えるという現実があります。このことは単に大きな不平等であるばかりでなく、このことが図書館職の専門性についての社会的評価を低め、結果として、どの教育体系での司書資格取得であっても資格取得者の図書館への就職率を逐年的に低下させ、今や「司書」資格は実際の就職とは関係のない、履歴書の資格欄を埋めるだけの資格になったと言っても過言ではありません。このような事態を放置しておくことは図書館学教育に携わる者にとり、あってはならないことと考えます。ではどうするかと言えば、「司書」という資格は資格として与えるにしても、その意味づけを変える必要があるのではないかでしょうか。図書館法上の規定は規定として、国民が一般に使う意味での日本語としての「司書」とは、既に図書館の専門的

に高度な知識や技能をもった知的高度専門職という意味ではなくなります。もとよりこの資格を得ても就職が保証されるわけではありません。図書館職の就職試験においても、司書資格保持者が図書館でのアルバイト経験がある無資格者よりも有利に受験できる実務知識を有している保証もありません。ただ、一般の社会人や学卒者より若干図書館の仕組みについての知識があると言う程度に過ぎないのです。これを図書館リテラシーというなら、司書資格保持者は図書館リテラシーを持っており、その多くは図書館の重要性を認識し、図書館活動のシンパでもあるでしょう。このような人達が社会に増えることは図書館や図書館学の将来にとって、必ずしもマイナスではありません。

一方、21世紀の社会における司書は、図書館法で言うところの図書館の専門的職員として真に機能するために、文部省令の講習科目やそれに準じた課程で養成される現行の司書の域を越え、更に高度な専門性を要求されるようになるでしょう。もしそうならなければ、司書の資格の存在意義がなくなるばかりでなく、情報の国際間流通も拡大する中で、日本の図書館の存在そのものも危うくなりかねません。そのような高度な司書の資格は、現行の司書が若干の実務経験や研修での知識習得で得られるような資格では無いはずです。その資格が大学院でのプロフェッショナル・スクール卒に与えられるのか、資格試験の合格者に与えられるのかはさておき、現行の司書資格とは一線を画すことにはなるでしょう。こうしてみると現在司書資格を与えている、我々の図書館学教育は次の三つの異なる教育目標を持つと言えるでしょう。

- (1)図書館リテラシーを有する図書館利用者の増大
- (2)学術研究分野としての図書館学の教育と研究に携わる研究者・教育者の養成
- (3)情報社会における真の図書館専門的職員の養成コースに入る人材の教育

この3項目の中、既に(1)と(2)は実現されたか、されつつあり、逆にもつとも古くからの図書館学教育が志向した(3)こそが21世紀に持ち越された課題として、残ったと言えましょう。このためには、まず高度な図書館専門職の資格を創り、名称を定め、その資格を取得する方法を明らかにしなければなりません。資格取得の方法は、高度職業人を養成する大学院等で、従来通り所定の単位を取得し、大学院課程を修了すれば資格取得できるのか、それとも資格認定試験を行い、合格者に資格を与えるのかは検討の余地があります。しかしどちらにせよ、その入学資格や受験資格を現行の司書資格保持者に与えるとするなら、現行の図書館学教育との関係はスムーズに進むでしょう。

この問題は我々の図書館学教育の分野からのみならず、早晚図書館の実務分野からも、行政サイドからも問題提起されるかもしれません。我々が問題提起するにせよ、されるにせよ、将来に禍根を残さないように対応できる態勢を固める必要があります。今後の図書館学教育部会の対応によろしくご支援のほどお願い申し上げます。

また、図書館学教育部会員の各位におかれましても、各位の勤務先大学の自己点検・評価の問題が喫緊の課題となっている折から、それぞれの図書館学教育の目標が(1)、(2)、(3)のどれかを見据え、単に教育する側の自己満足に終わることなく、教育を受ける学生にとっても、またその教育課程を設置する大学にとっても魅力ある図書館学教育であるか否かを客観的にご検討いただきたい思います。

そして一日も早く、「今世紀の初頭から見れば、図書館専門職の養成は大きく進歩した」と言える日を迎えていきたいと思います。年頭に当たり、世紀の幕開けにあたり、部会員各位のご健勝と共に、ご発展・ご健闘を祈り、年頭のご挨拶と致します。

全国図書館大会 第12分科会(図書館員養成) 記録

図書館学教育の外部評価:半世紀にわたる司書講習および司書課程教育を顧みて
(2000年10月26日)

司会 小田光宏(青山学院大学)
宮部頼子(白百合女子大学)
運営 阪田蓉子(明治大学)
分科会係 新里瞳(沖縄県立図書館)
記録 緑川信之(図書館情報大学)
(参加者数 64名)

報告者発言要旨

1. 開会の挨拶

高山正也(部会長／慶應義塾大学)

これまで図書館学教育のカリキュラムの内容について検討してきたが、それがどのような効果をもたらしているかを考える段階に来ている。そこで今回は、公共図書館、大学図書館に在職している方たちから、自分が受けた司書講習や図書館情報学の専門教育について意見を伺うこととした。

2. 基調講演:図書館学教育－再考

細野公男(慶應義塾大学)

今日の話はあえて過激な内容を意図しているが、特定個人・特定機関のことではない。

アメリカのライブラリースクールは閉鎖されたり内容が変わったり(ライブラリーがとれた)したが、日本とアメリカとでは体制が違う。アメリカではライブラリースクールが独自の責任でいろいろなことを実行できるが、日本では必ずしもそうではない。設置科目の方向性、講習科目の単位数が適切かどうかの基準、専任教員の数などをどこまで自由に決められるのか。専任教員の役割は何なのだろうか。授業だけしていればよいのか、それとも意志決定の責任者となるべきなのか。授業科目の内容も従来通りでよいのだろうか。授業方法も板書の時代ではないかもしれない。教科書はどうだろうか。さらに、教員の質について問うことは仲間同士のことなのでタブー視されてきたが、そういうことも言っていられない時代になってきた。こうした状況から、図書館学教育

の再考が求められている。

まず、図書館学教育の目的は何なのか。誰のための図書館学教育なのか。こうした問題は教育部会の在り方にも影響するであろう。我々が図書館学教育を行うのは、(1)図書館員養成のため、(2)受講者のため、(3)図書館学教育者(自分)のため、(4)開講・設置機関のため、(5)行政機関のため、といった理由が考えられる。図書館界・図書館員のための教育であるならば、専門職養成に徹するべきであり、その場合には何らかの方法で養成機関にグレードをつける必要がある。専門職養成でないならば、ほかの道、たとえば情報リテラシー教育としての図書館学教育を考える必要がある。自分の属している機関が何を目標としているのかも考慮に入れる必要がある。JLAの一部会である教育部会は、当然、専門職養成としての図書館学教育を考える立場にあるが、就職状況の悪さ(供給過剰)、大学の中での認知度の低さ、図書館の現場のニーズとのギャップなどを考えると、専門職養成だけを考えていよいのだろうか。

次に、教員の質についてであるが、これには、(1)専任と非常勤、(2)バックグラウンド、(3)広い視野と柔軟性、(4)年齢、(5)教授法、といった問題があげられる。専任が必要な理由は、図書館学教育を何のためにどのように進めるべきか、そのプログラムを自分で展開できることが求められているからである。非常勤では影響力を行使することができない。また、専任は図書館学教育の専門家であることが必要である。ただし、図書館学教育全体を見渡せる人であれば非常勤でもよいかもしれない。専任と非常勤の話は単純ではない。バックグラウンドについてであるが、授業に関して言うならば、現場での長い経験は必要ではない。現場とは別の、教育に固有の能力と工夫が必要である。そして、広い視野と柔軟性をもたなければならない。知識や技術を持っているだけでは専門家とはいえない。知識や技術は時代とともに変わるのであり、そういう意味ではみんな素人である。このような要求に対応できる教員を要請しなければならないが、大学ほど教員の教育・研修が行われていないところはない。強制的な継続教育が必要であり、司書養成機関が独自に研修を行う必要がある。

3. 事例報告I: 公共図書館から見た図書館学教育

立川由美(大分県立図書館)

司書資格を大学在学中に司書講習を受講して取得し、卒業時に大分県立図書館に採用され今年で6年目となる。最初の3年間は児童サービスを担当、次の2年間は一般書の選書から整理、カウンター業務などの仕事をし、この4月からレファレンスを担当している。

平成9年度から司書講習のカリキュラムが改訂されたが、自分が受けたのは旧カリキュラムなので、新カリキュラムで学んだ人の意見も聞きたいと考えた。また、自分が受けた講習だけでなく、司書課程や通信教育を受けたできるだけ多くの人の意見も聞いてみたいと思い、アンケート調査を行った。対象は大分県内の公立の公共図書館で司書または司書補の資格を持つ職員である。正規職員、嘱託職員、臨時職員などの別は問わず回答をお願いした。市町村立図書館のほかに公民館図書室が1館含まれている。7月下旬に質問票を24館97名に郵送し、21館93名(96%)から回答を得た。ただし、名簿等に掲載されていないアルバイト職員などにも回答してもらったので、配布した分の96%ではない。主な結果は、(1)実践的な内容が必要、(2)演習・実習の強化、(3)より尊重される司書資格制度を、(4)継続的な現職者研修の実施を望む、である。

受講した科目で仕事に役立っているものをあげてもらつたが、旧カリキュラムの中で圧倒的に回答の多かったのは、資料分類法、目録法、参考業務とそれぞれの演習である。これらは日常業務で必要、実践的、基本的な科目だからという理由があげられている。分類法演習に比べて目録法演習が少ないが、これは演習ではカードの書き方が主であるが、実際は電算化されていてあまり使うことがないからではないかと考えられる。一方、図書館活動、図書館通論、図書館資料論、図書館史などをあげた人は、図書館で働くための基礎になっている、仕事の上での指針になっている、など理念を学んだことが役立っていると考えている。新カリキュラムでは、レファレンスサービス演習が多い点は旧カリキュラムと同じだが、資料組織概説・演習が少なく、理由も書かれていません。単位数が減ったことも原因の一つかもしれない。新カリキュラムで目立ったのは児童サービス論と図書館サービス論である。

資格制度については、多くの人が、等級制度や認定試験などによりもっと資格認定を厳しくし、専門職としての司

書の地位を高めてほしいと答えている。実際に司書としての仕事に就ける人はほんのわずかなのに、司書が量産されていることへの批判もあった。県立図書館主催で「大分県公共図書館等職員研修」が年6回開催されているが、この研修も含めて、職員体制や旅費の関係で研修になかなかいけない館も多いのが実状である。

4. 事例報告 II: 司書講習受講雑感

運天厚子(豊見城村立中央図書館)

現在の勤務先である豊見城村立中央図書館にたまたまでかけたとき、「沖縄国際大学 司書、司書補講習受験生募集」のポスターを見かけた。いずれ再就職をしたいと考えていたが、年齢を考えると何か資格を取りたいという思いが強かった。「図書館司書資格」が頭をよぎったのは、上書の趣味の欄にはいつも読書と書き、小さい頃から本を読むのが好きだったことはもちろんあるが、次のようなことも影響していたと思う。ポスターを見かける前年(平成8年3月)に豊見城村立中央図書館が開館し、期待を胸に初めて図書館に足を踏み入れたとき、真っ先に脳裏に浮かんだのは「図書館は動いている」「図書館は変わった」であった。この図書館の変化が、自分が司書資格を取ろうと思ったきっかけとなり、また現在、司書として働く上でも、司書のあるべき姿を考える上での基礎にもなっている。

司書講習の講義はどれも司書としての専門性を身につける上で基礎になるものを培ってくれたと思うが、中でも課題として与えられたレポート作成は、苦労した分、特に印象深いものがある。ある講師が強調していた「本について知ることはもちろんだが、社会情勢について目に向けること、世の中でどのようなことが起こっているのか、常に关心を持ち、アンテナを張ること、ニュースを聞いてください、新聞に目を通してください」という言葉も胸に刻み込まれている。

平成11年4月に臨時職員として採用され、司書としての生活が始まった。最初の2、3ヶ月は無我夢中で過ぎていった。司書という仕事は肉体労働でもあることを知った。カウンターに座って真っ先に心がけたのは、気持ちよい応対をしたいということであった。「こんなにちは」「本は見つかりましたか」と、声をかけることを心がけている。マナーの悪い子どもたちには、腰をかがめて、「図書館は運動場ではないよ、静かに本を読むところだよ、走ってぶつかったら危な

いよ」と根気強く話すことにしている。日常業務で生じた疑問点や問題点などを話し合う会議に非常勤職員は参加していなかつたが、上司の計らいで参加できるようになった。司書講習で学びたかったこととして、著作権がある。今後どうなっていくのか、先を見越した具体的なものを講習に期待したい。また、講習終了後に、受講生や図書館員を対象としたフォローアップ講座も開いていただきたい。実際に現場に身を置いてみると、司書にとっては厳しい現実があると痛感せざるを得ない。司書職にとって、現状打開と未来への展望を示せる図書館学教育であってほしいと切に願う。

5.事例報告Ⅲ:大学図書館から見た図書館情報学教育

木下和彦(慶應義塾大学日吉メディアセンター:現在は同大学理工学情報センター)

平成元年に図書館情報大学を卒業し、慶應義塾大学メディアセンターに就職した。10年以上前の卒業なので、現在のカリキュラムは当時と変わっていると思うが、当時受けた教育について述べさせてもらう。プログラミング言語は毎週レポートがあり、二度とコンピュータを見たくないと思ったが、図書館システム運用・管理能力を養う上で役に立っている。MARCは普段の業務では使わないが、システムを用いて重複をチェックするときなどにMARCの知識があるかどうかが決定的になる。大学で学ばなければどこでも学べない。

一方、大学図書館の業務内容のイメージは大学で学ぶことができなかつた。これは学ぶ側にも問題があるかもしれない。また、司書教育は公共図書館向けといふことも関係しているかもしれない。本の修理方法も学ばなかつたが、図書館の現場では重要である。ボロボロになった本は誰も借りない。しかし、業者の修理用品・用具を見てもわからない。酸性紙問題についての話は聞いたが、もっと具体的な修理方法・資料保存法について話をした方がよい。ILLも大学図書館では日常業務だが、大学で習ったような決まったルールがあるわけではなく、実際の運用でまかわされている。

自分が10年前に受けた教育と現在の現場とのギャップとしてあげられるのは、まず図書館業務のシステム化である。大学図書館では目録カードはほぼ全廃し、Internet OPACが当たり前になっている。ILLのシステム化も進

んでいる。次にあげられるのはインターネットという新しい「媒体」の登場である。特に、レファレンス業務は紙媒体のレファレンスブックからインターネットに広がつた。また、図書館内にインターネット用PCを設置し、コンピュータ/ネットワークを活用できるようにするという新しいサービスにも対応できなければならない。インターネットが使えないのは相当なハンディである。

職場における最近のトピックとして、まず情報リテラシーがある。各学部の講義の一こまを借りて図書館スタッフがやつている。スタッフには負担だが、やっただけのことはある。図書館からの情報発信が必要である。レファレンスでの質問内容もアップする。その他、電子ジャーナル、Z39.50(インターネット上での情報検索の標準化)、メタデータ(Dublin Coreなど)があげられる。メタデータは図書館学の目録と同じではないか。目録技法の一つとして扱ってはどうか。

図書館就職「冬」の時代は、図書館情報学教育にとって危機である。しかし、同時に、ようやく社会が追いついてきた「情報社会」へ図書館情報学の視点からもっと切り込むことができるはずであり、情報リテラシーなど別の角度からもアプローチすることによって、危機をチャンスに変えられるはずである。

6.問題点の整理

高山正也(部会長／慶應義塾大学)

3件の事例報告のまとめ。

＜討議＞

会場:教員養成への特別コースを慶應義塾大学で用意する気はないか。

幹事:「Professional school」としては考えていかなくてはいけないかな」とは思うが、入学試験、カリキュラム、学位などの問題があり、教員養成に的を絞ることが難しい。博士後期課程はすでに教員養成であり、教育ではなくなっている。しかし、図書館情報学では専門分野を狭めていくことは当面は許されないのであろう。

会場:自己点検評価表をまとめてはどうか

幹事:必要だが、どういう項目を入れればよいか。

会場:(1)実践性といわれたが、専門学校でなく大学で司

書教育をするべきかについてどう考えるか。(2)大学教員は建前として研究者であるべきだが、教育との関連についてはどうか。(3)細野氏は教育における情報技術を強調したが、たとえば、Power Point は本当に授業に役立つか。教科書も役に立つのではないか。

発表者: 実践的というのは現場の図書館業務に役立つ教育をということと、実習・演習をということである。

会場: 即戦力を養成するのは専門学校ではないか。考え方を教えるのが大学教育ではないか。

発表者: 賛成である。技術は必要で、教わる方もわかりやすい。しかし、理論は必要である。

幹事: 基本的に賛成であるが、医学や法学でも実践的な教育を行っている。即戦力を育成することは軽々にできるものではない、と考える。ストーリーテリングをやってそれですぐにできるものではない。

会場: 大学では即戦力にならない人を育て、現場の OJT で育てるという考え方には成り立つか。

発表者: 成り立つと思う、としか言えない。

会場: ある程度の実践をこなしていく力は必要。目録もレフアレンスも現場で手取り足取り教えてもらうわけだが、小さな図書館では一人でやっていくしかない。

幹事: 必要性についての議論だけでなく、「どのように」について意見をもらえないか。司書講習担当者の受け止め方はどうか。

会場: 文部省の制約が多くて、思うように司書講習は時間割を変えられない。

会場: 文部省の制約は大きい。定められた科目を履修して司書を取れるだけでは図書館学教育の役割は果たせない、と考える。カリキュラムにない課題も必要である。

会場: 現場から、役立つ授業は欲しい、との意見が出ている。20 単位内で大学がどれだけそれに対応できるのか? JLA 案は 24 単位であるが、これは実線だけでなく理論も入れているからである。これをさらに広げる努力が必要。しかし、大学は冬の時代。即戦力を強調すればするほど、大学とは何かと考えざるを得ない。図書館以外の所から見たらどうなのかを考えなければいけない。

7. 特別報告:図書館学教育の五十年

朝比奈大作(横浜市立大学)

1999 年に調査を行い、先日刊行された『日本の図書館情報学教育 2000』の編集委員長として、その編集過程および集計結果について、過去の踏査結果と比較しながら報告する。図書館情報学教育を行っている学校 228、大学院 7、司書講習 7、司書教諭講習 64、計 306 件の回答があった。そのうち、専門教育を行っている大学・短大 11、司書資格の取得できる大学・短大 194+7(講習)、司書教諭資格の取得できる大学・短大 165+64(講習)、その他の図書館情報学教育実施校 18 である。教員総数は 1449 名で、そのうち、日本図書館情報学会会員は約 600 名、教区部会員は約 280 名で、教育部会員は教員総数の 5 分の 1 でしかない。前回調査時(1993 年調査)に比べて、今回は司書講習科目の改訂、学校図書館法の改正と司書教諭講習科目の改訂、教職課程の改訂などがあった。

<質疑応答>

Q プライバシーの問題もあって、名簿には個人的情報が載せにくくなっていると思う。今後のことについて考えを聞きたい。

A 回答があつたとおりに記載しており、それ以上追求はしなかった。住所を載せるのがよいのかどうか、またできるかどうか。

Q 無回答はどれくらいあるのか。今後フォローするつもりか。教務課よりも実務担当者に調査票を送ってはどうか。

A 調査からもれている分については、今後わかり次第何とかの形(部会報など)で報告していく。

Q 年齢は公表していないが、年齢に関して何かわかったことはないか。

A 年齢に関してはまだデータを入力し終わっていない。

Q 高校の図書室に備えてもらうと、図書館学の普及によいのではないか。

8.閉会の挨拶

高山正也(部会長/慶應義塾大学)

(文責:緑川信之幹事)

参 加 者 の 声

(1)今回のテーマ

・大変興味がありました。小・中・高校での「情報教育」、インターネットの普及などしてお現行のカリキュラム、内容、方法は3~5年しかもたないと思います。その参考としてどんな発表がなされるか関心をもちました。

(2)基調講演

・興味深いものでした。
・教員の役割、質について適切な評価であった。
・外部評価として 現職者からの指摘がよかったです。
・「過激に」という前置きがあつてからの講演でしたが、誰のための図書館学教育なのかー図書館界か、受講者か、教育者か、学校か、資格取得後の司書職需給のアンバランスの問題、図書館学教育が今後目指すものは、といった普段頭の中で考えたりはするが、少なくとも私の前では表立ってふれられることのなかったテーマでのおはなしを開くことができて非常に興味深く、面白く、また問題認識を新たにしました。
・現在、短大での課程教育の環境づくりPRなど“孤軍奮闘”していますが、そのための示唆が多く自信をもちました。
・「外部評価」は図書館学教育担当者の成果物(失礼ない方ですが)である現場の図書館員ではなく、図書館の利用者が司書と非司書を比べる上で出てくると考えています。聞くにはいろいろ支障があるかもしれません試みてほしいところです。

(3)発表

・現場の方の話が聞けたのが良かったです。
・現場の方の報告はよい企画だったと思います。特に立川さんの報告は興味深いものがありました。
・事例発表は参考になる点や納得のいかない点(本の補修を科目に取り入れることについては多いに疑問、オン・ザ・ジョブトレーニングやセミナーで学べばいいことと考える)があつたが、今後講義を行う上で考えさせられる問題提起が含まれたように思う。
・立川、木下さんの発表は参考になった。
・大分県のアンケート調査が参考になりましたが、なぜ新カ

リのなかで「情報サービス概説」がぬけていたのでしょうか。

(4)プログラム構成

・進行について、討議・情報交換の時間がもう少し長い方がよかったですかと思います(4年続けて参加しての総じての感想でもあります)。

・まとめて質問する方式をかえた方が良いと思います。(話が終わつたあとホットな状態でやり取りした方がよい)
・細野氏を最後まで残すべきでした。もしくは細野氏が退出されるのであれば、細野氏がおわられた時点で質疑を受けるようにすべきでした。

(5)今後の希望テーマ

・司書資格と就職の問題について、テーマとして取り上げ、資格認定試験の導入なども視野に入れてみては(JLAとして)どうかと思う。
・図書館も曲がり角といわれています。その点を教育の立場から追求。
・①慶應大、図情大、愛知淑徳など研究者育成コースのある大学におけるFDの実際についての発表②図書館学課程における授業評価(学生による)や授業研究(教材開発)について(来年度学内研究費により共同研究をすすめているので、他校の情況を知りたい)。

(6)その他

・教育部会の出席者が少ないのでがっかりした。もっと事前にPRしてはどうでしょうか。
・図書館学教育、図書館員養成については教員自身の自己研修の機会をもちたいのですが、部会での情報を楽しみにしています。
・図書館学担当教員が現職者研修にどのような役割を果たしているかを調査する必要がないだろうか?そこでの内容は大学における教育にどう反映されているかといったことも考えてみたい。
・司書講習の50年についての話もあってよかったですではないか。

(文責:宮部頼子幹事)

2000年度第2回研究集会のお知らせ

昨年5月に引き続き、今年度第2回目の研究集会を開催いたします。前回は、レファレンス・サービスや情報検索サービスにおけるインターネットの活用に焦点を当て、図書館学教育のファカルティディベロップメントを試みました。今回は、そのファカルティディベロップメントの第2弾として、資料組織技術を取り上げることにいたしました。前回の研究集会では、実際にパソコンを用いた演習を一部組み入れたことが好評だったため、国立情報学研究所(NII)のご協力を得て、今回も、コンピュータを使った目録作成システムの演習を取り入れることになりました。この関係で、今回の研究集会では、参加人数の制限をさせていただきますので、下記の要領にて早めにお申し込みください。

第2回研究集会「図書館学教育におけるファカルティディベロップメント(2): 資料組織技術の最新動向」

日時：2001年3月5日(月)9:30～17:00(受付開始9:00)

場所： 国立情報学研究所(NII) 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター20階(最寄り駅：地下鉄東西線竹橋駅または地下鉄半蔵門線・都営三田線・都営新宿線の神保町駅、いずれも徒歩5分程度。詳しくは、<http://www.nii.ac.jp/map/hitotsubashi-j.html>をご覧ください)

內容:

【午前の部:コンピュータ演習】

国立情報学研究所(NII)による演習:(1)CAT、ILL、IR、ELS 各システムの概要説明、(2)CATを中心としたコンピュータ演習

【午後の部：講演・事例報告】

「米国の図書館情報学教育の動向」三輪眞木子氏((株)エポックリサーチ)

「NCR の最新動向—国際的な動向との関連における—」古川肇氏(中央大学図書館)

「BSH の最新動向」柴田正美氏(三重大学)

「資料組織演習の事例報告」渡部満彦氏(東横学園女子短期大学)

定員：30名（先着順）

参加費：部会員 2000 円、非部会員 3000 円

申込方法：①氏名(よみ)、②所属、③電話番号、④連絡先(住所、FAX番号、電子メールアドレスのいずれか)、
⑤JLA図書館学教育部会の会員かどうか、の5点を明記して、下記の申込先に電子メール・FAX・はがきのいずれか
でお申し込みください。会場の都合で申込が定員の30名を超えた場合には、原則として先着順にさせていただきます。
申込の受理に関しては、電子メールまたはFAX・はがきにて、折り返しご連絡申し上げます。

申込先：岸田和明 〒 郡

申込締切日：2001年2月28日(木)

(ただし、上記のとおり、原則として先着順に受け付けていますので早めにお申し込み下さい)